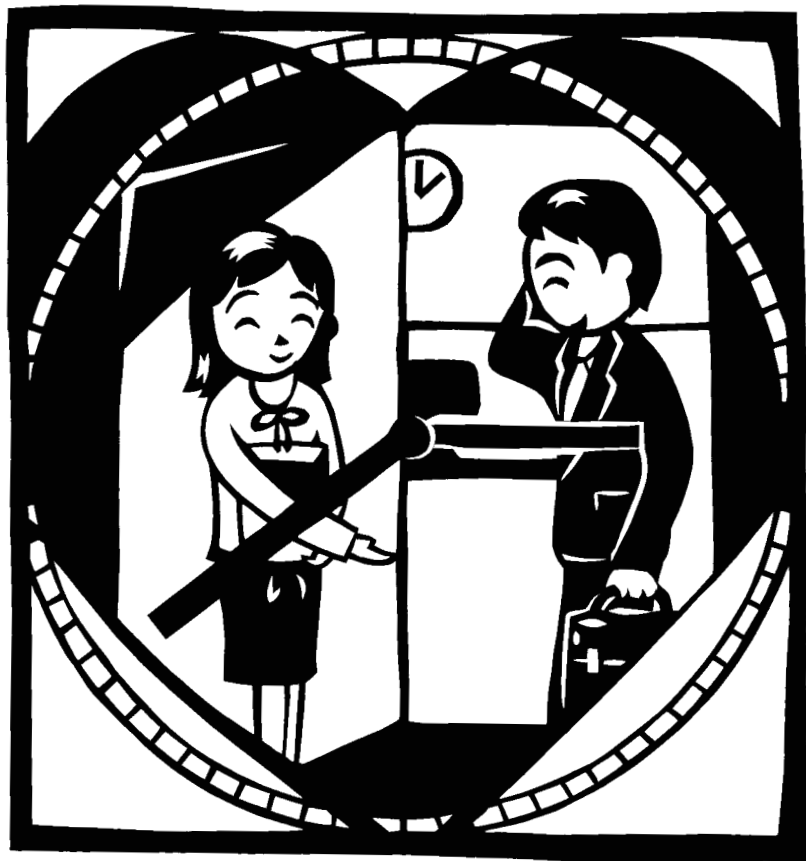


「お先にどうぞ」の心



私たちは、特に急いでいるときなど、「われ先に」という気持ちが出てしまいます。そんなとき、心に少し余裕を持つ、「お先にどうぞ」と道を譲ってみてはいかがでしょうか。その行為はすなわち、自分の時間をほんの少しだけ犠牲にして、相手に時間をプレゼントしていることでもあるのです。

今回の『ニューモラル』は、「時間のプレゼント」をキーワードに、「お先にどうぞ」の心について考えてみたいと思います。

時間泥棒？

ちゅうけん
中堅メーカーに勤める山田さん（25歳）
は、営業職として、プラスチックや金属

製の部品を自社や協力工場で製造し、それを大手メーカーに供給するという仕事をしています。ある日の朝礼後、山田さんが直属の上司の大山課長（42歳）と、新しい部品の図面について、最終確認をしているときでした。





「山田さーん。電話だよ」

「大山課長、ちよつと失礼します。すぐ戻ります」

そう言つて山田さんは自分のデスクに戻り、受話器を取りました。

「お電話代わりました。営業二課の山田ですが……」

「山田さん？ 実は、とつておきの話があるのですが……」

なれなれしく話す相手の目的は、何かの勧誘かんゆうのようです。

「ねえ、山田さん。将来の生活設計、何か準備していますか。実はね、今、皆さんにお勧めしている話があるんですけど、一度考えてみませんか……、絶対、損ひんはしませんよ」

山田さんは、明らかに勧誘かんゆうの迷惑電話

だと確信しました。

「まいったな。今は打ち合わせの真つ最中。しかも大山課長を待たせている格好だし……」

そう心の中でつぶやきながら、山田さんは気が気ではありません。すぐにでも電話を切りたいのですが、気の弱い山田さんは、なかなか切り出せませんでした。電話の相手も慣れた口調で、山田さんの都合などおかまいなしに一方的に話し、しつこく食い下がってきます。

「私、そんな話には、まったく興味がありませんから!!」

意を決して発せられた山田さんの声が事務所のフロアに響くと、周囲の人たちはようやく、山田さんの置かれている状況が飲み込めました。大山課長も気づき、

山田さんのデスクのところ近づいてきます。

「まずい。早く切らなくては……」

あせる山田さんでしたが、受話器の向こうからは相変わらず、「絶対に損はさせません」「今がチャンスです」と畳みかけってきます。しばらく静観していた大山課長でしたが、ついに業を煮やし、山田さんから受話器を奪いました。

「もう二度と電話してこないでください!」

ガチャン! 大山課長は受話器を置きました。

「す、すみません。大山課長……」

「まあ、山田君の性格からして断りにくいのは分かるけれども、仕事には優先順位があるから、すぐに断らな

きや。特にこうした迷惑電話は、相手の時間を奪っていることだからね」

「はい。以後、気をつけます」

すると大山課長はつぶやくように言いました。

「そもそも、ああいう、相手の迷惑を顧みない電話自体が『時間泥棒』って言うんだよな」

『時間泥棒かあ、言い得て妙だなあ』

山田さんは、大山課長の「時間泥棒」という言葉があまりにも的確な表現だったので、思わず吹き出してしまいそうになりました。

山田さんは、少なくとも自分が相手に電話をかけるときぐらいは、用件を整理して手短かに話をするなど、時間泥棒にはなるまいと心に誓いました。



“時間のプレゼント”をする

その日の昼食後のことです。山田さんは午前中に大山課長と確認した設計図を持って、プラスチックの成型せいけいをする協力工場を訪れました。その事務所の玄関げんかんドアの前に立ったときのことです。昼食から戻ってきた若い女性社員と鉢合せはちあわせとなりました。

その女性は、山田さんに気がつくこと、さつとドアを手で引き、「お先にどうぞ！」と、にこやかな笑顔えがおで通してくれました。

“なんて礼儀れいぎ正しいのだろう”

感心した山田さんは、設計図の打ち合

わせを始める前に、先ほどの出来事を、工場長の大下おおしたさんに話しました。

すると大下さんは言いました。

「それはうれしいですね。『お先にどうぞ！』というのは、うちの社員が目ごろ、特に強心きやうしんがけていることなんですよ」

大下さんによれば、出入口や狭い通路などで相手に譲るのは、近年、全社的な取り組みとなっており、それも自分の会社内で実践じっせんするだけでなく、訪問先でも徹底てつていしているとのことでした。

「うちの社長はね、よく朝礼なんかで私たちに話すのですが、『お先にどうぞ！』



と譲るのは、ほんのちよつとだけ自分の時間を犠牲にして、相手にその時間を譲ることだって言うんですよ」

山田さんは、またまた感心してしまいました。なにしろ、その日の午前中には、相手の時間を奪ってしまう「時間泥棒」



を体験したばかりです。この会社の「時間を譲る」という取り組みが、それとはまさに正反対だと感じられたのでした。

この「お先にどうぞ」と相手に譲る心づかいが、「時間のプレゼント」と気づいた瞬間でした。

僅かな時間を 惜しむあまりに

今日、企業間競争が激しさを増す中で、時間当たりの生産性を少しでも高めようと、成果主義の名のもと、社員間の競争が奨励されています。

もちろん、社員同士がお互いに切磋琢磨することは、組織を活性化し、企業が競争に生き残るために不可欠だといえます。しかし、その競争が加熱し過ぎると、

さまざまな弊害を生じてくるのもまた事実です。

例えば、同僚を押しよせのけてでも早く仕事を進めたい、ということになれば、職場の雰囲気はギスギスしたものになってしまうでしょう。

ビジネス・コンサルタントの山崎武也さんは、次のように言っています。





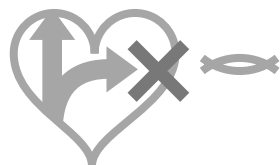
「仕事の世界で考えるときは、常に競争を頭に置いておく必要がある。だが、仕事の間であれ日常の間であれ、自分が体を動かすときは、自分の身を一步引く心構えに徹してみる。(中略)自分が急いでいる場合であっても、逸る気持ちを抑え

て、『お先にどうぞ』と言って自分を後にする。そのために遅れる時間は僅かである。どんなに長くても秒単位でしかない」(『道経塾』平成十七年十二月号 モラロジー研究所刊)

ここで重要なことは、たとえ相手に時間を譲ったとしても、それはほんの僅かな時間に過ぎないということです。

中国の古典に「終身路を譲るも、百歩を枉げず」という言葉があります。ここにある「枉げず」とは「超えない」ことであり、人に道を譲ったその合計を一生足したとしても百歩の距離にもならないということを示しているのです。

私たちは、僅かな時間を惜しむあまりに、「お先にどうぞ」という相手を思いやる大切な心を失っていないでしょうか。



ある寒天メーカーの取り組み

ここで、会社全体でユニークな取り組みをしている事例を紹介しましょう。

長野県伊那市に本社を置く寒天のトップメーカー・伊那食品工業㈱の取り組みです。

同社では毎朝、社員がマイカーで通勤してくる場合には、右折での進入を禁止しているのです。要するに、車で本社に通勤する人は、わざわざ五百メートルばかり周囲の道を遠回りするなどして、左折のみで進入してきます。

もし右折を禁止せず、何十台もの社員の車が、いわゆる「右折待ち」（対向車が通

り過ぎるのを待つこと）すれば、その間、何台もの車が後ろに連なり、渋滞が引き起こされます。その度に渋滞に巻き込まれる人からすれば、「なんで、毎朝、同じ場所で待たされなければならないんだ」とイライラし、その待った分だけ、「時間を奪われた」と感じるでしょう。それを防ぐためにも、また安全面からも、同社では右折を禁止しているのです。

現在、道を行く人々は、毎日スムーズに車が流れているので、そのことに気づいていませんが、こうした小さな取り組みを通して、少しでも社会に迷惑になら

ないように、できることからしよう、と
というのが同社の考え方です。

また同社の社員は、自社の敷地内で駐
車するときはもちろん、プライベートで
スーパーマーケットなどの駐車場に車を
止めるときでも、他の利用者の便を考え
て、お店から最も離れたところへ車を止
めて、お店までわざわざ長い距離を歩い
ていきます。なぜそのようなことに取り
組んでいるのかについて、同社の塚越寛
会長は、次のように語っています。

「そうすれば、店に近いところに駐車
の場所ができるので、妊婦さんやお年寄
り、体の不自由な人や荷物の多い人への親切
につながります。モラル（やる気、士気）
の高い人はモラルも向上します。そうし
た社員を育てることによって、さまざま

な場面で社会に貢献することになると思
います」（塚越寛著『いい会社をつくりましょ
う』文屋刊）

こうした同社の取り組みは、自分が犠
牲にした分だけの時間を、見ず知らずの
他人に対してプレゼントしている行為で
あるとも、とらえることができます。



譲る心を教える自動車教習所

では、私たちは誰のために時間を譲るのでしょうか。

相手に譲るのだから、「相手のために」という答えが考えられますが、はたしてそれだけででしょうか。

車を運転して、相手に譲るどころか、二台、三台と、無理やりに追い抜いて行く人もいます。しかし、そうした運転は非常に危険で、事故に遭遇する確率は確実に高まります。仮に人身事故でも引き起こせば、取り返しのつかないことになるでしょう。

反対に、常に「お先にどうぞ」と、相

手に道（時間）を譲るような人は、会社に行くにしても、少し早起きして、時間に余裕をもって出かけるようになります。

こうした心のゆとりを持つことが安全運転となり、未然に交通事故を防ぐことにつながり、結果的に、道を譲った本人の利益となるのです。

島根県にある自動車教習所・益田（ますだ）ドラビングスクールでは、一般の路上に向かう道の途中に、「譲（Give Way）」と書かれた標識があります。それは、運転者にとって「譲る」ということが極めて大切なことであり、それを教習生に伝え

るためなのです。

例えば教習車が、路上でゆっくり運転しているとき、いつのまにか後ろに何台か、数珠繋ぎじゆずつなとなることがあります。そういう時には、安全な場所で教習車を左に寄せて停車させ、後続の車を先に行かせているのですが、それは決して、他の急いでいる車のために行っているだけではなく、教習生に『譲る』ことの大切さを指

導するために行っているのです。

益田ドライビングスクールの小河二郎こがわじろう会長は次のように語ります。

「他人や自分を傷つけないために、いちばん重要なのは『ドライバーの心』なのです。たとえば、狭い道路を走るときです。『譲り合いの心』を持たなければ、すぐに道がつかえ、あちこちから怒鳴りどな合いが始まってしまいます。また、『いたわりの心』を持たなければ、自転車や歩行者が安心して通ることはできません」（小河二郎著『全国から人が集まる不思議な自動車教習所』PHP刊より）

「譲り合いの心」を發揮はたらしたり、「いたわりの心」を持つことは、他人を傷つけないだけでなく、自分自身を傷つけないためにも大切な心なのです。



よりよい社会を実現するために

みなさんは「共有地の悲劇」という言葉をご存じでしょうか。

アメリカの生物学者・ガレット・ハーディンが提唱した概念で、次のような寓話とともに紹介されています。

ここに一定の広さの共有の牧草地があり、そこで牛を飼育している人が何人かいるとします。ある牧夫は、他の牧夫に先んじて、牛の頭数を増やして収入を増やしました。それを見たほかの牧夫たちも、「われ先に」とこぞつて牛の数を増やします。しかし、牛が増えれば、その共有の牧草地は過密状態となって、や

がて荒廃し、牧夫たちは共倒れとなつてしまいます。それをハーディンは「共有地の悲劇」と名づけました。

狭い道路や出入口のドアなども、私たちがみんなの「共有地」ですから、お互いに譲り合うことをせずに、「われ先に」と争つて進めば、先の「共有地の悲劇」のように全員が不利益を被るでしょう。

その反対に、お互いが「お先にどうぞ」と譲り合えば、例えば狭い道路を例にとつても車はスムーズに流れ、結果的に

つまり
三万よしと
いうことだね



自分、相手、そして周囲の人たちとみな
が利益を得ます。世の中の人みんなが、
こうしたことを少しでも心がければ、渋
滞などの現象の多くは解消され、より暮
らしやすい社会が実現できるでしょう。
自分もよし、相手もよし、社会全体もよ
しという「三方よし」となるのです。

もし、あなたが道を譲ったり、時間を
プレゼントすることの大切さに気づいた
ならば、たとえどんなに小さなことでも
実践してみてください。それをひたすら
実践し続けることで、知らず知らずの間
に、あなたのまわりに笑顔が増えていく
でしょう。こうした姿を目にすることで、
きっと、あなた自身がいちばん大きな報
酬しょうをもらっていることに気づくはずで
す。

